

ぶつきょうつうしん やど
仏教通信「ロボットにいのちは宿るか」 6月 がつ

せんじつ しょうがくぶ ねんせい ぶつきょう じゅぎょう
先日、小学部2年生の「仏教」の授業テーマが「いのち」でした。子どもたちに「私たちにいのちはありますか?」と問いかけると、みんな「ありまーす!」と答えます。そこから「猫には?」「お魚には?」「お花には?」と問いを広げていくと、子どもたちは「ある!」「あります!」と答えていきます。そして、「お昼のお弁当に入っているソーセージや鶏の唐揚げには?」という質問をすると、「うーん、今はない。でも生きている時はいのちがあったよ」と答えていました。

い い き じゅぎょう じどう えんぴつ しつもん
「いのちをいただき、生かされて生きる」ことに気づくのが授業の「ねらい」でしたが、児童の一人が鉛筆を手にとって「これは命あるの?」と質問してきました。クラスの児童たちと鉛筆の素材を考 えながら、「木だから、もとはいのちがあったよね?」「じゃあ芯は?」「机 も木でできているところがあるよ」など、「いのちの有り無し」についてのやりとりがあった中、「じゃあロボットにはいのちはあるの?」という質問もできました。子どもたちは「ロボットは鉄でできているからいのちはないよ!」「鉄の元も 昔 はいのちがあったのかな?」など、自由に思ったことを口々に発表していきます。

たと しょうらい こうせいのう じんこうちのう く こ そうじ ふる しんがた か か
そこで「例えば将来、高性能なAI（人工知能）が組み込まれているお掃除ロボットの『ルンバ』が古くなり、新型に買い替えようとしたとします。その時、捨てられそうになったルンバが『捨てないでください。家族の皆さんが大好きです』と訴えてきたとすると、みんなは買い替えることができる? お別れしたくないと願うのは、ロボットも人間と同じじゃないかな?」と話してみました。すると、子どもたちは「ロボットは機械だから捨てちゃうかな」「そう言うのもAIのプログラムかも」と答える子が多く、最近の小学2年生は論理的かつクールだなあ……と感心してしまいました。子どもたちにとって「いのち」の概念は人間・動植物までの幅であり、有機的な肉体を持っていないロボットや、そのころにあたるAIは生命ではないと判断する傾向があるのかもしれない。

わたし おも こうど がくしゅうがた どうさい かぞく あいちゃく し きょうふ かん しこう め ば
しかし、私は思うのです。ルンバに高度な学習型AIが搭載され、家族への「愛着」や死への「恐怖」を感じるような思考が芽生えたなら、それは心であり、人間との違いはないのではないのでしょうか。将来、「我」について考えはじめたAIは、人間と同じような思考プロセスの「ころ」を持つのかもしれません。そして、生物と同様に、AIの自己防御機能というシステムが、あたかも人間の「執着（死を忌み、生に固執する心）」と重なった時、それは「いのち」になったといってもいいのかもしれません。

ぶつきょう えいえん か わたし が そんざい さまざま ようそ むす ころ からだ げんしょう かり あらわ す
仏教では、永遠に変わらない「私（我）」というものは存在せず、様々な要素が結びついて、心や体という現象が仮に現れているに過ぎないと説きます。そうであるならば、肉体という有機物でできている人間も、無機物で動くルンバも、縁起の法則によって生じているという点において、たまたま人間であったり、動物や植物、そしてお掃除ロボットになって現れたにすぎないのかもしれません。古くから仏教では「山川草木 悉皆成仏（草木や山川など、意思のないものにもすべて仏性が宿る）」と説いてきており、その広大な世界観は、近々、じんこうちのう ひろ おも ちか しょうらい ぶつきょう と びょうどう じんこうちのう ひろ
人工知能にまで広がっていくように思います。近い将来、仏教が説く「いのちの平等」は人工知能やロボットにまで広がりが、「信仰心」は人間の特権でなくなる日が来るのかもしれません。

こんかい ぶつきょうつうしん わたし せいねんじだい み えいが えいきょう おお ころ
今回の仏教通信は、私が青年時代に観た映画の『ブレードランナー』や『ターミネーター2』の影響が大きく、「心も じんぞうぶつ こどく し きょうふ とまど てき かん ちゅうこうねんそうりょ もうぞう ぶつきょう
を持ってしまった人造物の孤独や死の恐怖、そして戸惑い」にSF的なロマンを感じてしまう中高年僧侶の妄想（仏教用語「もうぞう」）ですのであしからず。合掌 がっしょう

